

県教育庁教育次長 久保田 範夫

□ 現場の教師にとっての授業

前回89号で私は、「進退窮まった時には、原点に戻るしかない、私たち教育に携わる人間にとっての原点は『授業』であると考えます。」と書きました。

今回は、現場の教師にとっての授業について、あるアンケート調査から稿を起こします。中学校の教師が自分たちの仕事をどう捉えているか。松本良夫氏、荻谷剛彦氏らの研究によれば、8割以上の教師が「本来の仕事」と答えたのが以下の項目です。

- ・ 授業や授業の準備に関わる仕事 99%
- ・ 生徒の気持ちを理解しようと努力すること 86% ・ 学校行事の指導 86%
- ・ 問題のある生徒の指導 85% ・ 勉強の遅れた生徒のための指導 84%

これらから教師本来の仕事を3タイプに分けると、①授業に関する仕事、②生徒との関係に関わる仕事、③他の教師と共に学校組織を動かしていく仕事、ということになり、さらに様々な考察に広がりますが、ここでは、現場の教師のほとんどが、授業に関する仕事が自分たちにとって本来の仕事だと考えていることを確認しておきたいと思います。

□ 吉田 彌(ひさし)先生の授業

私たち教師仲間は、吉田彌先生のことを親しみを込めて「彌(や一)先生、彌(や一)さん」と呼んでいました。先生のことは、今まで何度か高校の校長先生方の前でも話しましたし、私以外の教育関係者も様々な場面でその人となりを含めて紹介してきました。先生は、昭和28年に須賀川高校で教師となり、平成2年3月安積高等学校長で退職しました。(私は、先生最後の学校勤務となった昭和63年度と平成元年度の2年間を国語教師として共に過ごし、実に貴重な時間と記憶を共にすることができました。この時期は、大学入試センター試験の方式が変わり、関西圏の優秀な受験生が東北まで押しかけ、東北の受験生は受験の時代を迎えようとしていました。その時の教え子が、今年40歳(!)になるので、まさに光陰矢の如し・・・。)

先生は平成5年より8年間、本県教育委員を務め、その間、2期にわたって委員長を務められ、男女共学化など重要施策を推進されました。もっとも先生の話を知りたいという教育関係者はたくさんいたはずですが、昨年11月に81年の生涯を終えられました。

私がこれから紹介する授業に関するエピソードは、先生から直接お聞きしたものもありますが、生前に書かれた貴重な一冊『教師～青春の伴走者として～』(*)から引いたものです。

(*)平成20年11～12月福島民友新聞に「私の半生」として連載されたものを第1章「教師を生きる」、平成14年5月新任高校長研修会で話された内容の速記録を第2章「校長への応援歌」、最後に書き下ろしとして、船引高校の新任校長であった時の授業の思い出である第3章「校長の授業」を加え、平成21年6月末に発行された著書。自費出版であり、残念ながら市販されていません。

◇ 新任高校での経験

～優秀な生徒が、自分のクラスではなく「受験指導のベテラン」の先生が担当する隣のクラスに移ったことを機に、寝る間を惜しみ家族から見て「尋常ではない」努力を重ねた話。

◇ 母校での最初の授業

～三年生の古文の授業、生徒全員が、教科書・ノートを机上に出さず背筋を伸ばし先生を凝視、先生は、生徒たちが「学びがいのある教師」か否かを見極めようとしていると考え、動揺することなく丁寧に授業を進めた。先生が、無礼に対する説明と謝罪を求め、「学ばんとする者の無礼は、人間の美しさの放棄」と告げたのに対し、学級委員長は無礼を詫び、これからの枕草子の勉強が楽しみになったこと、教えがいのある生徒になることを約束した話。

◇ たったひとつの会心の授業

～四面楚歌その他の章を含む漢楚の興亡の授業を終えて、先生は2年生の生徒たちに次のように投げかけた。「私の読みは一つの解釈にすぎず、別の解釈が可能のはずだが、それを知りたい」と。その後の二回分の授業を、生徒たちは討論に充て、その結果を発表、先生に講評を求めた。先生は、生徒たちの深い考察に百点を与え、そして、その授業が先生にとって、「生徒が主人公の授業」として生涯たった一度の会心の授業となったという話。

吉田先生の書を読み返すたびに、「私たちは寝る間を惜しんで授業の準備をしているか」、「生徒が主人公の授業を今まで何回できただろうか」、と自分に問いかけずにはられません。

□ 「学びから逃走する」子どもたちという課題

私は、授業こそが教師の原点であることは疑いようのない事実と考えますが、教育に携わる私たちが忘れてはならない大きな課題があります。それは、佐藤学氏が、90年代以降の学力低下を探っていく中で、学力低下は子どもたちの怠惰や教師の教育力の低下によるものではなく、子どもたちが学びから逃走し始めていることに起因すると考えて提起した「学びからの逃走」の問題です。かつて日本の子どもたちは、世界一と言っても過言ではないほど意欲的に勉強に取り組んでいましたが、「今や、世界でもっとも勉強を嫌悪し、勉強しない子どもへと転落し」（佐藤学氏「学力を問い直す」岩波ブックレット）ていると考えざるを得ないのです。教育関係者は、この大きな課題を視野に入れながら学校の「授業」を考えていく必要がありますが、いずれこのことを論じなければならないと考えています。

□ 結び～念ずれば花ひらく

最後に、吉田先生に教えていただいた詩を紹介してこの稿を閉じたいと思います。先生は、この詩を高校生たちに、そして、その場にいた私たち教師に繰り返し語りました。

念ずれば花ひらく 坂村真民（さかむら・しんみん）

念ずれば

花ひらく

苦しいとき

母がいつも口にしていた

このことばを

わたしはいつのころからか

となえるようになった

そうして

そのたび

わたしの花が

ふしぎと

ひとつ
ひとつ
ひらいていった

坂村真民氏は、1909（明治42）年熊本で生まれ、25歳で朝鮮に渡り教職につき、戦後は四国で暮らし、2006年（平成18年）に永眠しました。

「念ずる」には「祈る」の意味もありますが、我慢するの意もあります。私は「何事も一所懸命、念ずるように努力し堪え忍ぶならば、おのずから道は開けるのだ」と解釈しています。

東日本大震災後、福島県の教師たちが、ともすると心が萎え、挫けそうになる（なった）、という話を時々耳にしました。このような時だからこそ、この詩を繰り返し読んで、教師の本来の仕事であり、原点である授業に全力を傾注して、子どもたちの心を耕し、学びから逃げない子どもたちを育て、福島の復興につなげてほしい、との思いを強くしています。（了）

これから教師本来の仕事を3タイプに分けると、①授業に関する仕事、②生徒との関係に関わる仕事、③他の教師と共に学校組織を動かしていく仕事、ということになります。

小・中・高等学校で教鞭をとり子どもたちに勉強を教えている先生方は、①の「99%」は当然と感じたでしょう。②には難しい問題が潜んでいるように思われます。子どもたちの気持ちを理解しようとする時に、その全てを理解している必要がある、或いは、その全てを理解しようと努める必要がある、と考えることは危ないのではないか。心理学の専門家ではない教師が、児童・生徒の気持ちを理解するとすれば、学習や進路との関係、学校内・学級内での行動といった、子どもたちの、あくまでも「〇〇学校の生徒」としての側面に限られるはずで、この問題は、学校教育の範囲、領分という問題、そして学校教育への社会からの期待という問題を含むので、今回はこれ以上触れないようにします。ただ、現場の教師のほとんどが、授業に関する仕事が自分たちにとって本来の仕事だと考えていることを確認しておきたいと思います。

吉田先生の書を読み返すたびに、「私たちは寝る間を惜しんで授業の準備をしているか」、「生徒が主人公の授業を今まで何回できただろうか」、と自分に問いかけずにはいられません。

私自身を振り返ってみると、「新採用時と比べて、自分の教師としての力はどのくらいアップしているだろうか」と自問する日々でした。新採用の頃はマイクロカセットレコーダー（マイクロとは名ばかりで、葉書の3分の2くらいの大きさでした）を教卓に置いて自分の授業を録音し、声のメリハリ、間の取り方等を確認、少しでも生徒を引きつける質の高い授業をしたいと考えていたものです。（現在では、教師がお互いに授業を見て批評することが当たり前になってきましたが）質の高い授業によって真の学力を身につけさせるためには、長時間の教材研究と授業のシミュレーションが必要になりますし、何よりも、それを継続していく意欲、能力とエネルギーが必要です。私は、担任している生徒たちによくこう言いました。「『私は、やればできるんです』と言うのは努力をしない者の言い訳だ。努力をする能力が必要なのだよ。」と。

□ 「学びから逃走する」子どもたちという課題

私は、授業こそが教師の原点であることは疑いようのない事実と考えますが、教育に携わる私たちが忘れてはならない大きな課題があります。それは、佐藤学氏が、90年代以降の学力低下を探っていく中で、学力低下は子どもたちの怠惰や教師の教育力の低下によるものではなく、子どもたちが学びから逃走し始めていることに起因すると考え提起した「学びからの逃走」の問題です。かつて日本の子どもたちは、世界一と言っても過言ではないほど意欲的に勉強に取り組んでいましたが、「今や、世界でもっとも勉強を嫌悪し、勉強しない子どもへと転落し」（佐藤学氏「学力を問い直す」岩波ブックレット）ていると考えざるを得ないのです。そして、「教育を受ける権利」がある子どもたちが、「何故私たちは学ばなければならないのか」、「算数を学ぶことは何の役に立つのか」という問いを投げかけ勉強から逃げようとしています。この問いには一理あるように見えますが、昭和生まれの子どもたちはこのような疑問を持ったのでしょうか。このような問いが子どもたちから出てくるはずがない、ということが戦後教育制度の前提であり、その中で育ってきた教師は文字通り絶句するしかないはずですが、まじめな教師の多くは、子どもたちに分かるような答えを出して説明しなければならないと考えてしまいます。これは、教育関係者には避けられない大きな問題であり、このような大きな課題を視野に入れながら、学校の「授業」を考えていく必要があることが重要ですが、いずれこのことを論じる必要があると考えています。